

## ラフカディオ・ハーンと正岡子規・夏目漱石の接点

西川盛雄

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は卑近な日常生活の諸相を民俗学的な視点をもって日本を解釈し、これを英語で広く欧米に紹介・解説していった。例えば道端の盆踊りや子供の情景や小さな昆虫や昔から伝えられて来ている民話や俚諺などに深い興味を示している。特にハーンが日本の短詩型文学に深い関心を寄せていたことは特筆しておいてよい。『霊の日本』のなかの「小さな詩」のなかでは、「日本の国では詩歌は空気のように偏在している。国民の誰もが詩歌に心を寄せている。」（平井呈一訳）と解説している。ここでいう小さな詩とは日本古来の五・七のリズムをもった短歌・俳句のことである。さらに「これを選別してみれば、あるいは日本人のある感情の特質を解明する役に立ちはしないだろうか」（同上）と言い、日本の短詩型文学の考察を通して日本人の心の深層に迫っていくことができるのではないか、ということを示唆している。

明治二十年年代の後半、短歌と俳句を「写生」という言葉で括って日本の定型文学の近代化を目指したのは正岡子規であった。その子規は伊予松山の人であり、学友に日露戦争のときの海軍中将秋山真之がおり、同時に旧制一高以来の親友夏目漱石がいた。後に熊本にあって漱石は自らの作品と寺田寅彦の作品を松山に送って子規に俳句の添削を受けたりしている。子規が日清戦争の従軍記者として中国に渡って帰還の途

中略血し、しばらく神戸で療養していたが、やがて帰郷、明治二十八年八月、漱石の松山での仮寓（「愚陀佛庵」）の階下にくろがり込み、以後二人の共同生活が五十日余り続くのである。その間この庵で行われた松山松風会の句会のことはよく知られている。高濱虚子や内藤鳴雪、河東碧梧桐らが集い、日本の新興俳句の新しい息吹がこの頃、この地に芽吹いていたのである。言うまでもなく夏目漱石もこの中にいた。

漱石は慶応3年（1867年）に現在の新宿区喜久井町で名主の五男として生れ、生後すぐ里子に出されたりするが、すでに江戸時代からの漢詩や南画の世界に触れて育っていた。十五才で二松学舎に通って漢文の世界に親しんでいたが、翌年大学予備門受験のため成立学舎で英語を学び始める。子規とは明治二十二年、旧制第一高等中学で同級になり双方とも好きな寄席の話で親しくなっていた。明治二十八年四月、漱石は愛媛尋常中学（松山中学）の英語教師として赴任し、一年後には熊本・第五高等学校に異動。ここで中根鏡子と結婚し、長女筆子が誕生する。熊本で4年3ヶ月滞在した後、ロンドン大学に官費留学したが彼の地で「下宿籠城主義」を貫いて文学論の構築を夢見て読書に心血を注ぐが、そのさ中、明治35年（1902年）の秋に漱石は子規の訃報をロンドンで聞くのである。この時子規の死を悼んで虚子に送った手紙には次のような句が添えられていた。

筒袖や秋の柩にしたがはず

(明治三十五年)

手向くべき線香もなくて暮の秋

(同上)

「筒袖」とは洋服のことである。これは「倫敦にて子規の訃を聞いて」と前書きして五句作っているうちの二句である。明治35年帰国直前の12月1日、ロンドンからの虚子宛の手紙に記されたものである。

この漱石は旧制の第五高等学校においても東京帝国大学においても恒にハーンの後赴任するというめぐり合わせをもっていた。そして漱石は作家としても教育者としても著名なこの16歳年上のハーンをいたく気にしていたのである。

漱石作品には『夢十夜』という作品がある。その〈第三夜〉は「こんな夢を見た。」という出だしで始まる怪談話である。話是这样である。闇の夜、ある貧しい父親が六つになる子供を負って田圃の中を歩いている。その子は何時の間にか眼が潰れ青坊主になっている。何時の間にか背中で発する子供の言葉はまるで大人の声で、しかも対等である。父親が気持ち悪くなって子を打遣りたいと思いながら森に差し掛しかったとき、後ろで「ふふん」という声がするのである。やがて杉の根っ子のところに差し掛かかったとき、「丁度こんな晩だったな」とつぶやき、「お父さん、その杉の根っ子の処だったね」と言うのである。そして「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」と言ったとたん、背中の子が急に

石地蔵のように重くなる、という譚である。

実はこの漱石作品の原型は、出雲の持田浦という村のある百姓についての民話である。貧しさゆえ生れた子を六人まで川へ流したが、やや生活が出来るようになって七番目の男の子を育てる決心をして、生後五ヶ月になったその子を腕に抱いて夜の庭に出たところ、「御父つあん、わしを仕舞に捨てさした時も、丁度今夜のような月夜だったね」と言った後、一瞬また元の幼児にかえるのである。その後この百姓は僧になった、という譚である。

この二つの話はよく似ている。平川祐弘氏も指摘しているように、漱石はハーンを意識して自らもハーン作品に迫ろうとしてこのような再話による怪談を創ったと考えられる。ここにハーンと漱石の接点がある。加えて同じ小さな鳥の命のすさまじさとあわれさを扱ったハーン作品「草ひばり」と後の漱石作品「文鳥」もどこか似ている点興味深い。

ハーン作品中に子規に繋がって松山に関係する作品はないものだろうかと思っていたら例の『怪談』の中にあつた。「十六ざくら」がそれである。この「十六ざくら」にちなむ作品を子規は確かに残しているのである。

松山には「十六ざくら」がある。和田茂樹氏によると、〈十六日桜は節会桜などといわれたが名月上人以後、孝子桜として著名、山越の龍穩寺境内にある〉とのことである。生れ故郷の松山の句を子規は多く残したが、そのひとつにこの「十六ざくら」

の句がある。

孝行は筍よりも桜かな

(明治二十五年)

さてこの十六日桜は伊予の国和気郡にある桜の木である。桜の花の咲くのは春四月と相場は決まっているが、この桜だけは冬のさ中、陰暦の正月十六日に花を咲かせる。その謂れにはこの桜に花を咲かせるものは人間の切なる魂の力であることを証しているのである。

話はこうである。ある伊予の国の侍が、屋敷にあった桜をととても大切にしていた。しかし幼児からこの木の下で育ち、両親、係累も皆大切に世話をし、思い出のいっばいつまったこの桜の木が枯れたのである。すでに老年になっていたこの侍はこの木をいたく悲しみ、自らの命に替えてこの桜の木に花を咲かせようとしたのである。やがて木の命の身代わりに立つことを決意したこの老人は型通りの作法を守って自刃し、自らの魂魄を桜の木に乗り移らせたのである。その日が丁度正月十六日だったのである。それ以後雪の降るこの時節の十六日に決まってこの桜には命の証のように花が咲く、というのである。

さて十六日桜を訪ねて子規は今ひとつ句に残すのである。

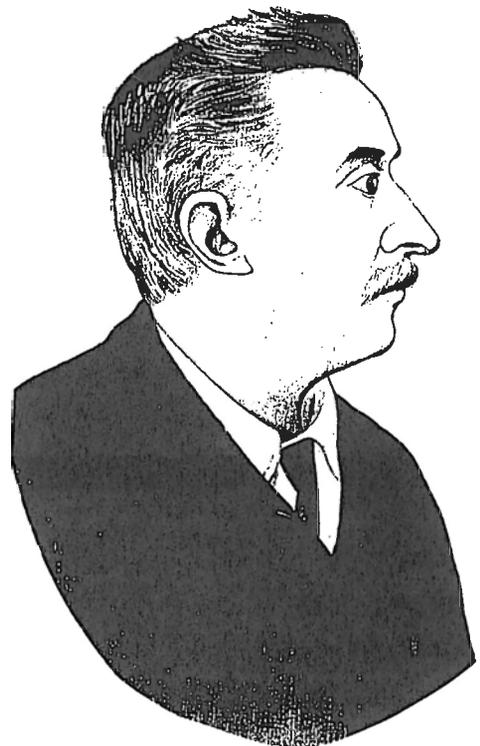
うそのやうな十六日桜咲きにけり

(明治二十九年)

ハーンは多く説話や民話を再話文学とし

て自らの創作のスタイルとしていた。そこには超自然的な霊の世界、あるいは幻視の世界が展開されており、またそこには素朴な庶民のモラルも含意されている。ハーンの『中国怪談集他』『怪談』『骨董』『天の川綺譚』『霊の日本』『明暗』『日本雑記』等に出てくる多くのハーン作品はこの再話文学であったことは心に留めておいてよい。

(にしかわ もりお 教育学部教授)



小泉八雲肖像画